
怪談落語～月面重力ゲタ道中～

ぐるわ姉妹

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

怪談落語〜月面重力ゲタ道中〜

【Nコード】

N4678C

【作者名】

ぐるわ姉妹

【あらすじ】

いつものごとく女にふられては、友人アンソニーの家に来て泣きわめくジョン。それをぶっきらぼうにいなしていたアンソニーは、夏の夜空を見上げ、ふと提案いたしました。「おいジョン！ お月さんへ行こうじゃねえか！」 でぶで体の重いアンソニーと、やせで心が重いジョンの二人は、互いの欠点を軽くするべく、重力が地球の六分の一だという月に向かって旅立ちます。意気揚々と月面に下り立った二人でありましたが…。【携帯改行有】

怪談落語～月面重力ゲタ道中～

(前書き)

これは「夏ホラー2007」参加作品です。

てけつく、てんつく、てけつくてん。

え「旅は道連れ世は情け」なんてえことを世間様では申しますが、旅なんてもんは気心知れた仲間であつてもそうそう気軽に行くもんじゃあ御座いやせん。そりやまた一体なぜかと申しますと、毎日自分が暮らしてる町内ひとつ取つたつて、勝手の判らねえことのある人間がですよ、耳に聞いただけの観光地になんか行つちゃあ、お連れさんに迷惑がかかるつてえもんで。ましてや気心の知れた仲間にかける迷惑つてのは、配慮も無ければ遠慮もないと大方相場は決まっております。

今日皆様にお聞かせする噺は、ちよいと変わったお江戸の話に御座います。どうか、ひとつお付き合ひ願いたいと思います。

場所は江戸の浅草、浅草寺。せんそうじあの有名な雷門を真つ直ぐ臨める貧乏長屋の一角に、一人の男が暮らしておりました。

その男というのがまたとんでもない太り肉で、歩くよりも転がったほうが速いと周囲から冷やかされるほどの贅肉の持ち主。名は「アンソニー」と言いまして、うだる蝉声に痩せる思いがするつてんで、九尺二間の座敷の上で大の字に寝転がってばかりおりました。

お天道様の落ちた夕焼け空の下、遠くから近づいてくる甲高い男の叫び声に、することもなく畳に転がっていたアンソニーが溜め息とともにまぶたを持ち上げて呟きます。

「……ああ。…あの声ア、ジヨンの奴だアな？ あの調子じゃいいニュースじゃねえなア……」

よっこいせと反動をつけてまん丸の体をぶよりと起こしたアンソ

二丁の目の前で、貧乏長屋の障子がスパーンと開きました。そこに勢いよく飛び込んで参りましたのは、近くに住む男の「ジョン」で御座います。

「ぶわあああん、アンつあん！ いるかい、ちきしょうおおお！」
「おお、いるよおい！ まったくなんてえ声出しやがる…、おおう、今日はどうしたんでい！」

一部屋しかない四畳半の真ん中にどつかと座ったアンソニーが、ぐいと上のほうを見上げると、ジョンのひよろりとした枝みてえな体が泣き声に合わせて上下しておりました。

「ぐすつ…今日はなあ…女に…女に振られたんでええ〜いい…」

へなへたと土間にヒザをついて泣き続けるジョンの姿を、うちわ片手に見下ろすアンソニー。

よくみれば、背丈に体重度胸に気質、どれを取ってもまったく正反対のこの二人であります。なんとも不思議なことにガキの時分から仲がよく、兄弟みてえな間柄で御座いました。

「何だ、おめえまた振られたってえのか！ あーあーあー、そんなシケた面ア見せんじゃねえよ情けねえなあ。…つとにおめえつて奴ア、トコトン押し弱え野郎だなア！ どうせまた据え膳食わずに、しびれ切らした女に横つ面引つ叩かれたんだろつが」

「今日は、そおじゃねえんだよおう！」

「あーそうかいそうかい、それじゃああれか？ 今日の女は、抱き上げられなくて振られたんだな」

アンソニーが、手にしたうちわでジョンを小ばかにするような仕草をしてみせると、ジョンの顔からは涙やら鼻水やらが噴水みてえに噴き出した。

「……………びええええ〜ん！ 当たりだアこんちくしよお〜。女があんなに重いなんてよお〜…うわああん」

土間で突っ伏してわんわんわんわんと泣くジョンに、アンソニーが体中の肉を揺らして呆れ返ります。

「おいおめえさんよお、道端にいる犬じゃねえんだからそうワンワンと鳴くんじゃねえよまったく。泣いてばかりいねえで、ちったあ体力でもつけたらどうなんかい？ 大の男が、これから抱こうって女をベッドにも運べねえでどうするってんだ！ ホラ、まずはこっち上がった、これでも食ってよオ！」

アンソニーが傍らからざっと引き寄せましたのは、大皿に盛られた水まんじゅうの山。その半透明で包まれた黒山の頂上をむんずとわし掴みにしたアンソニーは、「これが手本だ」と言わんばかりに手の中いっぱいの水まんじゅうを一度で全部頬張った。

「もおんむん…むんがむが…もっちゃらもっちゃら…ごくりっ…つぷはあ〜！」

その見事な食いつぷりにジョンの目はただただ丸くなるばかり。べたつく手の平をべろりと舐め上げたアンソニーが、一向に立ち上がろうとしないジョンの首根っこを捕まえて、まるでネコでも放るみてえに畳の上へと放り投げる。

ジョンの体はきれいな弧を描いて座布団の上へとふんわり、ふんわりと落ちて……。

パサツ……。

この状況には昔なじみのアンソニーも天を仰ぎ、呆れた顔で両手を広げてしまいます。

「やいこの野郎オ！ 俺は女の紅差しなんかが入った巾着袋を投げたんじゃねえんだぞオ、せめてもっと人間らしい音オ立てて落ちやがれってんだ。なんならその辺のガキ連れてきたほうが、よっぽど人様らしい音オたてらあ！」

そう言いながら首にかかった手ぬぐいを引き抜き、アンソニーは顔に浮いた汗を拭った。

あぐらに座ったジョンが、その様子を幽霊みてえな形相で眺めます。

「……しよおがねえだろお〜、おいら、吹けば飛ぶってくらい軽いだからよオ……ひっく……」

「馬鹿なこと言うもんじゃねえよ、まがりなりにもジョンだって人間様だア、吹けば飛ぶなんてえこたアねえだろうよ。そんな簡単に人がとばされてたまるかってんだ。ほれ、ふーっとお！」

声を張り上げたアンソニーは、隣でしおらしくうなだれていたジョンを目がけて、胸いっぱい息を吹きかける。びゅおおおうつという音を立て突風のような一陣の風がジョンに向かって襲いかかりました。

「ひいっ、やめっ…やめておくれよお…アンっあ…あああああ
ああ……！」

なんとも驚いたことにジョンというこの男、アンソニーの吹いた一息でふわりとその身をあおられて、木の葉みてえにころころと、後ろに向かつて一目散に転げていくではありませんか。

そのまま勢いよく転がったジョンが、部屋のどん詰まりで後頭部を打ちつけて泣きわめく。

「うわああん、いてえよおおアンっああん！」

「あららら、こちら冗談のつもりでやったのになんでえ、本当に吹っ飛んじまったよ驚いたねえ。おい！ ジョンよお、でえじょうぶかい？」

のっそりと伸ばされたアンソニーの腕が、先ほどと同じくジョンの首根っこをつまみ上げ、今度はちゃあんと座布団の上に着としてやります。

「ずずっ……、なーあー、アンっあんよお、太ってるってのはどうだ？ 女にもてるかい？」

「ああ？ どうしたい、そんなこと藪やぶから棒に」

「もてるかもてないか訊いてるんだい。……おいら何としても、女つてやつにもててえんだもんよお……」

「何だよおめえ、まだそんなこと気にしてやがんのか。まったくようがねえ……。なに、俺がもてるのかって？ もてるかどうかっついたらおめえ……」

次第に言い淀むアンソニーの沈黙に、ご愁傷様と言わんばかりの

風鈴の音が一つ。

ちりーん……。

涼しげな音を運んでまいります。

気まずさにちろつと視線を泳がせ、所在なさそうに手ぬぐいをいじくりまわすアンソニー。

「…そりゃあ…ほれ…あれだ…。もてるさ！！ 女ぐれえなら十人は軽く『持て』らあ！」

ちりーん……。

儂く響く風鈴の音。

その余韻が消えた頃に、涙を拭いたジョンがけけけと笑い声を上げました。

「あはーあ、なあんだあ。アンつあんだっておいらと一緒だ、もてねえんだあ。」

愉快そうに笑うジョンの姿を、アンソニーが目の端でにらみます。「おう、だからどうだったんだ、ええ？ 確かに俺の身はこんなに重いがなア、半面、心は綿菓子みてえに軽いつからよ、おめえみてえに小さなことで泣いたりなんざアしねえんだよ。」

バタバタとうちわを扇ぐアンソニーはもう一方の手を水まんじゅうに伸ばし、寿司でもつまむみてえに食べ始めました。いやあその早いことといたら。見慣れているはずのジョンですらその目を離せないほどで御座います。

「しつかしまあ、アンつあんは茶もねえのによく食べらあな。」

「ふん！ 水まんじゅうなんてえもんはなア…むぐもぐ……んぐつ、三回以上噛んで食っちゃアいけねえの。つるんつとした喉越しがいんだよ、喉越しが。喉越しを楽しむのは蕎麦と同じよオ！ ……だいたいな、ジョン。おめえはガキの頃から細かいことばあっかり気にしすぎるんだよオ！ 心が重すぎらア、もつとライトに生きられねえのかよ。」

それを聞いた途端、ジョンはぐたつと頭を垂らすと言いました。

「心が重てえかあ……。アンつあくん……そういやあおいら、今

日の女にも『あんたチヨ―性格重た〜〜い』ってえ言われたんだよなあ〜。とほほ〜〜」

煎餅座布団の上に両手をつき、思い出し涙を浮かべるジヨン。

それを見たアンソニーは食べる手を止め、蒸し暑い空気の中でしかめた面をうちわで扇いだ。

「まあつたくよオ。おめえって野郎は、体は羽根みてえに軽くせして、心のほうはどこまでもヘビー級ときたもんだ。女の前でもそんな風にさめざめ泣いてばっかりじゃア、不甲斐がねえって振られるのもうなずけらア」

どんよりとうなだれたまま手の甲で涙を拭ったジヨンが、まだ涙で濡れているその顔をひよいと持ち上げてみせると切なそうに呟きました。

「でもなあ〜、アンつあん…。おいらさあ、てめえの女のためならあ、何つでもしてやりてえんだよおおっ！」

「何でもだア？ おいおい、そらまたデカく出たもんだなあ……………」

呆れ顔で上がりかまちから足をおろしたアンソニーは、黒々とあんなのついた指先を舐め回す。

そのでっぷりとした腕に突然すがりつき、ジヨンは必死の形相で訴えた。

「だって好きな女なんだぞお！ なんとしたって、そのコのためになりてえじゃねえかよお〜！ 好きなんだよ、おいらいつだってべらぼつに好きになつちまうんだよお、そうなつちまったらもう絶対離れたくもねえんだよお〜！」

「つかー…………、男のくせしてよくもまあ、そんなネチツコイ台詞はけたもんだなあ。…おめえそんなネチネチしてつとよオ、そのうち女との痴話ゲンカがもつれにもつれて、二人揃ってお陀仏なんてえことになつちまうぞ」

その言葉を聞いたジヨンは、蛙みてえにぴよんと飛び上がった後ずさると、口をぼかんと開けゆつくりと声を出します。

「そお言やあ…………おいら、言つてたわ…………、昨日の晩…女に、一緒

に死んでくれ…って」

その発言に、両手で顔を覆いながら溜め息をついたアンソニーが、指の間から蔑んだ目を覗かせジョンに向かって言い放つ。

「嫌だねー、これだよ。そんな落語みてえなことを本当にやったのかい。…それでえ？ 落ち合い場所は品川か？ それとも吉原かア？」

アンソニーの冷やかしに、ジョンはヒザを抱えて泣きわめきます。「ひいーん、なんだよオ！ 馬鹿にしゃがってえ！ アンつぁんだって…、アンつぁんだって、ダイエツトするって言ってたじゃねえかアッ！ なのに先月よりまた太りやがってさあ、水まんじゅうなんか食いまくってんじゃねえよお、でぶでぶでぶうーッ！」

抱えた両足を駄々つ子のようにじたばたとさせるジョンを眺めていたアンソニーが、空になった大皿をすつと脇へ押しやり、ジョンと向きあう形に座り直す。そして傍らにあつたキセルでもってジョンの頭をべけつと叩きました。

ジョンの月代さかやまで小気味よい音がしたかと思うと、ぽっこり、小さなこぶが浮きあがりました。

こぶの痛みと心の痛みでわんわんと泣き続けるジョンであります。一方アンソニーはといえば涼しい顔して慣れたもの。それもそのはず、ジョンはガキの頃から何かあるたびに、こうしてアンソニーのもとへと飛び込んできては、疲れ果てるまで泣き通さなきゃ帰らねえってえ性分です。それならいっそのこと二、三発殴ってやったほうが泣きに拍車がかかって疲れも早いつてもんであります。

戌いぬの上刻かひのちも過ぎたでしょうか。ようやっとジョンの鳴き声が、する程度にまで小さくなりました。

すっかり暗くなった長屋の中で仄明るい行燈あんどんに照らされたアンソニーが、吸い終わったキセルを火鉢の縁でコンツと叩いて火種を落

とします。最後の一番みを惜しむように吐き出したその口が、優しい声で話し始めました。

「ジョンよオ…おめえに手を貸してやりてえ気持ちは存分にあるんだが、…こと男女の仲となつちやあ…俺だつて、大した知恵があるわけじゃねえのよ。…もてねえのは、お互い様だ。だつてそうだろオ？ 俺アぼてぼてと図体がデカいだけのセイウチで、おめえは小さくて脆いイワシじゃねえか。そんな二匹が頭ア寄せ合ったところで、色恋砂漠のサバイバル指南なんざアできるはずもねえだろ。セイウチは熱風に強くはねえし、イワシは砂ン中泳がねえ。そんな俺たちに、灼熱の何が解るつてんだ……」

大きく溜め息をついたアンソニーが開けっ放しだった戸のほうに視線を流すと、そこには明るい月光がさーっと差し込んでいた。

「……ホントにおめえつて奴ア、ダメダメのじょんじょるジョンだよ」

そう言ったアンソニーは太いヒザに手をあてて立ち上がり、戸を閉めようと広くもない土間を進んだ。

閉める前に空を見上げれば雲ひとつない濃紺の中、ぽっかり浮かぶ優しい光。

「上弦も過ぎたかあ」

膨らみかけた半月をしばらく見つめていたアンソニーが、そのまま二歩三歩と表に出る。

「恋つつうのはよオ、とかく熱すぎらア。なのに落日を迎えたあとには、嘘みてえに冷え切つて。せめて…この月光くらい……、温かくいてくれればなア。……そう思わねえかい……ジョンよオ」

答えないジョンを振り向きもせず、アンソニーはその目に弓張り月を映し続けた。

空にひとつのその月は、彼の顔を覗けばふたつに増え。

天を見上げたまま、アンソニーは口元に笑みを広げ、もう一度泣き虫の名を呼びました。

「おいっ、ジョン！」

「……なんだよお、人を犬つころみてえにい。もオ……」

泣き疲れた顔のジョンが、涙でぐしょぐしょになつてる座布団から顔を上げると、長屋の外で月光を浴びているアンソニーの姿がその潤んだ瞳に映ります。子供みてえな顔をしたアンソニーが、夜空に浮かぶ真つ白い月を指差し、長屋の中でぐつたりと伏したまま首だけをこちらへ向けているジョンに、嬉々として声をかけました。

「月だ、月だよジョン！ お月さんに行こうじゃねえかつ！」

ジョンは土間に向かって座布団を絞りながら、くじゃけた顔で聞き直します。

「……はあ？」

その反応の悪さを見て、齒がゆげに身をよじつたアンソニーは、乱暴な足音とともに土間へと戻ってきました。

「ああんもう、この石頭のトンチキが！ いいかおめえ月つてのはなア、重力が地球の六分の一なんだよ！ お月さんに行きやあ、しちめんどくせえ減量なんかしなくても俺の体重は軽くなるつてえ寸法よ。つて事はだよ、ジョン。同じように重たいおめえの心も……俺と一緒にふーわふわだろが！ そしたらおめえ、俺たちや間違いないもつてもての色男よオ！！」

「お月さんに行くだけで、おいらの心も……ふーわふわア～？ ……そんなに上手くいくのかい……？」

いかにも訝しげな目つきで見上げるジョン。

いまいち食いつきの悪いそのまげをむんずと掴んだアンソニーが、乱暴にぐりぐりと引つ張り回す。

「なんだよ、その腐つた雄鶏おんどりみてえな面ア。お月さんで上手くいかねえ理由でもあんのかよつ」

右へ左へ前へ後ろへ、もう目が回るつてくらい揺さぶられたジョンは、大きな手にまげを放された途端ふらふらとよるめいて頭から土間へと落ちてしまいました。

「いたた、いてえよう……。だあってアンつあん、おいら怖えんだよ……。ほら……お月さんには咎人とがにんがたくさんいるつて言うぜえ。御奉

行様がお白州（おしろ）でさあ、どうしようもねえ大悪党に向かつて『島流じやあ物足りねえ、おめえなんざ月流しだあ！』ってお裁き下すんだろ？ 怖えよおお〜」

ジョンはそう言つて土間の端にある台所へと後ずさり、転がつていた鉄釜を拾い上げると、怯え顔をすつぱりと隠してしまった。

縮こまっているジョンの前につかつかと歩み寄つたアンソニーが、水がめの上に置いてあるひしゃくを手に持ち、ぱっかんぱっかんとして鉄釜を叩く。

「そんなもん、どうせ見えもしねえ月の裏側の話じゃねえか！ 表側じゃあ商人の町があつて、売り子の娘がたくさんいるんでい。色男になれて、もてるための女がいるんなら、お月さんに行くのが一石二鳥つてもんだらうが。両手に花も夢じゃねえぞ〜、うっひっひ。そら、そんな釜なんか置いてけ、行くぞ！」

アンソニーはジョンの被つた鉄釜をすぽんと取り上げて軽々と放り投げると、震え上がるジョンの手首を握りしめ引きずるようにして歩き始める。

「うええー！ ホントに行くのかよお！ おいら咎人怖えよおつ、アンつあん包丁どこ、包丁オ！」

なんて悶着がありました、アンソニーはうきうきと、ジョンはしぶしぶとした心持ちで、二人仲良くお月様までやつて参りました。うんと遠いお月様にどうやって行ったのか？ そんなことは心配御無用。

月はね、近頃じゃあめつきり観光地なもんですから、来るのなんて至極簡単で御座います。

じゃあどんなにかつてえと、月直通のシャトルバスに乗つかつて握り飯なんかをこつむしゃむしゃと食べながらね、後はビューーッと揺られてりゃたつたの一刻（いっせき）でお月様まで着いちまうつてんだか

ら、いやはや便利な世の中になったもんで。

さて、そう話しておりますうちに、アンソニーとジョンの二人は無事月面へと降り立ちました。思い立った旅の割には股旅姿またたびがどうに入っているお二人さんが、恐る恐るとした第一歩で粉っぽい大地に踏み入れます。

先に降りたアンソニーが、身軽になった嬉しさのあまり奇声を上げて月面ジャンプを繰り返しております。

「ヒャッハー！ 見ろよ、ジョン！ 俺ア地球じゃ一寸も跳べねえのに、月じゃこんなに高く跳べるぞオ！ いやー軽いなあ、来てよかつたなあ、やつぱ月は違うぜえ！」

ほんわりほんわり上下しながら前に進むアンソニーの後ろで、ジョンがバス停がわりの岩にしがみつき情けない悲鳴をあげる。

「アアア、アンつあん、やややつぱり帰ろうよ！ ……わっわっ！ 危ねええい、助けてええい！」

地球ですら巾着袋のジョンの重みが、月面になんか来ちゃあ塵よりも軽くなるのは当然のこと。何もせずとも既に浮いてしまっているジョンの姿を笑ったアンソニーが、バス停の隣にある掘建て小屋から無料貸し出しの鉄下駄を持ってきてジョンの前へと放り投げる。「それ履いてねえと、おめエみてえな奴ア、宇宙にまで素っ飛ばされるってよ！」

「と、咎人は？ 咎人いない？」

鼻をすすって涙をこぼしているジョンは鉄下駄に履き替えるあいだも、片手は胸の前で包丁を握りしめ辺りをキョロキョロとうかがっております。

「呆れたもんだ、本当に包丁持ってきやがったのかい。おめえはとことん臆病な野郎だなあ」

そう言いながらアンソニーは、ほんわりほんわり飛び跳ねて目の前に浮かんでいる地球をしげしげと見上げた。

暗闇に浮かび上がる何ともいえない美しさに、アンソニーの口は思わず馬鹿のように開いてしまう。

「つかあゝ、青いねえゝ！　そんでもってなんなんでい、このデカさは！」

地球は青く、あの貧乏長屋から見上げる月なんかよりもずっと大きく、その形はたとえるなら、痩せゆく下弦のごとくピツと引かれ、たきれいな弧を描いています。そこからの青い光は、絶えることなくこちらをきらきら照らしております。

ひとしきり地球を見つめたあと、アンソニーは鶴みてえな優雅さでジョンに跳ね寄ります。

「へーイジョン、どうで〜い！　心は軽くなつたかい！」

鉄下駄に履き替えたジョンは、その場ですしずしと足踏みして履き心地を確かめながら返事をしました。

「んー、あゝんまりだなア〜……」

「そうかい？　俺のほうはもう抜群にふんわかしてるぜえ！　まあ、おめえは気持ちのほうだし、もうしばらくかかんたろうなア」

その声にジョンが足元から顔を上げ宙を舞うアンソニーを目で追うと、彼の体を包む贅肉という贅肉が重力から解放されて浮き上がり、ただでさえ膨らんでいた体が余計に膨張して見えてしまいます。「しかしアンつあん、ほほの肉が浮きすぎだぜえ〜？　おかげで人相変わつてらあ！」

ぶふつとジョンが笑いをもらし、それを見たアンソニーは水を切る犬のようにブルブルと顔を揺らしてみせた。

二人は笑いながら月面小道をぶらぶらし、その先の目抜き通りに入る。

手にしたガイドブックにも『月でのお買い物はこちらが一番』と太鼓判を押されている場所である。

アンソニーが、『大通りに沿った土産物の屋は、毎日が御祭り騒ぎ！　そのうえ軒並み大安売り！』といった写真の映るガイドブックから顔を上げると、一体全体どうした事が、あたり一面は祭りの後みてえにしいんとしております。

店屋は揃って埃っぽく、木戸は外れているわ障子は破れているわ、

観光地気分を盛り上げる幾多の鮮やかなのぼりですら、薄汚れたその身を乾いた風にはためかせております。

「なんでいなんでい、ババア一人いねえじゃねえか！ こりゃ一体どういうこつたア！」

ふわんふわんと飛び跳ねて店内を確認するアンソニー。

その後ろで、ずしずしと歩いてきたジョンが、ぽつりと呟く。

「そついやあ…月で下りた乗客は、おいらたちだけだったなあ…アンつあん」

かぐや姫の伝説もありまして、月は売り子の女に宿屋の女、そのうえ旅行者の女もいて、それはさぞかし女だらけだろうと踏んでいたアンソニーは、諦めきれずに先へ先へと進みます。

「そんな訳ねえだろオよ、きつと俺たちより一本早いバスにはツア客がたんまり乗ってやがったんだよ、それだけのこつたア！」

「なーあ、アンつあくん、こりゃ～時季が悪かったんだよお。多分これ…：…シーズンオフだあ」

その声の遠さに後ろを振り向いたアンソニーは、ついてこないジョンに向かって大声を上げる。

「ケツ。なーにがシーズンオフだ！ 大体なア、月にシーズンなんであるのかよ！ それよりもなんでい、こちらの商売つけのなさは！ 月はもつと観光地としてのアツピールをしていかねえと、お先は真つ暗だぜえ！」

「ナンパできないからつて癩癩おこさねえでくれよお」

多くの店が軒を連ねる通りには、二人の声しか響かなかつた。

時おり吹く肌寒い風が、軒先の藍のれんを舐めるようにゆらゆらと揺らしていく。

二人の行く先を照らすくちなし色の提灯は、通りの奥とへ向かつてぼつつとした列をなしていた。

天を仰いだアンソニーが一刻半前いっときはなまえには自分がいた地球を見つめ、身震いをしてから呟く。

「…それにしてもよオ…：…意外に、薄つ気味悪い色なんだなア」

空から降り注いでくる青々とした地球光を、まるで水でもすくうようにして受け取ったアンソニーが、月光よりも冷たいそれをまじまじと眺めた。

たとえ昼でも真つ暗闇な月の空、雲もなければ青空なんざあ見当るはずも御座いません。

ましてや夜を迎えた目抜き通りには、くちなしの色の提灯が墨色の空によく映えて。

気がつけば浮かんでいたはずのお天道様はすっかり沈み、辺りはどんどん冷えてまいりました。

店先からの灯りがするりすると伸びてくる通りを歩きながら、首を伸ばして中を覗いたジョンは追いついたアンソニーのたもとをツンと引いて尋ねます。

「……なあアンつあん……なんだか様子が変じゃねえかあ？」

「なにがだよオ、シーズンオフなだけだろうが。変な事言うない」

「だってどこの店も……店終えた感じじゃねえんだ……。……これって……荒らされたんじゃないかな……」

アンソニーが顔を上げ、二人は立ち止まる。

息をひそめると、そこには何も無いような静寂だけが広がった。

にじる草履がじりつと乾いた音を立てた時。

ふいに、通りの奥のほうから凍えるような風が吹いた。

店先に並んでいた風ぐるまが端から順に回り始め、どこからともなく寂しげな隙間風の音が響いてくる。

「……みよ……妙なこと言うない、このじょんじょるジョン。どうせ気のいい商人たちだ、町内会館にでも集まってどんちゃん騒いで酒盛りなんかをやってたんだよ！ いいじゃねえかいいいじゃねえか、はっはっはーい！」

まばらに植わる柳が滑らかな枝を揺らし、さわざわとした声で背筋を撫でていく。

アンソニーのカラ笑いを聞きながら、ジョンは風の吹いてきた通りの奥をじつと見つめていた。

整地された目抜き通りは、くちなし色の提灯がぷつぷつりと途切れ
たあたりからどんよりと暗くなっていて、その一番奥には何がある
のか肉眼では解らぬほどで御座いました。

かたーっ！

突然落ちた風ぐるまに飛び上がったアンソニーが背後を振り返り
ますと、傍らにいたジョンが急に鉄下駄を鳴らして通りの奥へと向
かってゆきます。

「お、おい、どうしたんだよ！　こら、ジョン公！」

もう一度振り返ったアンソニーは焦るようなジャンプでもって三
歩ほど月面を蹴り上げ、ガチャガチャと走っていったジョンに追い
つきました。

見るとジョンは目抜き通りの一番奥、構えた鉄扉が関所にも見え
るその場所で、脇にあった立て看板に目を奪われております。

風化した杉板に朱墨で書かれた、極太の文字。目で辿りながら、
ジョンがそれを口にします。

「…立ち入り禁止。この先、月の裏側。咎人収容所…」

ジョンの隣で大きな扉を見上げるアンソニーが、腕組をしながら
声を出した。

「……裏側つてのはこんなにも近けえのか……。しかし、でけえ扉だ
なア。お城の門と同じくらいにみえらア！　でも…扉に『危険』
なんて書き殴るのはいけねえなア。これじゃア観光気分も興ざめじ
やねえか！」

「なあなあ、せつかくだしこの先に行ってみようよお！　ほら、こ
いつも持ってきたしさ！」

ジョンはひよろりとした体をかろうじて鉄下駄に支えられながら、
地球から持ってきた包丁をかざしてケタケタと笑う。

「なに言ってるのかね、このタコは！　さては月の重力で頭まで軽
くなりやがったな？」

そう言って、先に行こうとするジョンの首根っこを掴んだアンソ

ニーは、軽々とジョンを持ち上げてまげを掴むと、右へ左へ前へ後ろへ、頭をグラグラと揺すった。

「やっぱりだア、なんの音もしやしねえ。空っぽだ！ これじゃあ能無しじゃなくて、脳無しだ！ こいつアはいいや！」

ぶんよりとしたお腹に手を当てて大笑いするアンソニーを、首根っこを捕まれたままで見下ろすジョン。

宙に浮いたままジョンは口を大きくへの字にして、いい加減笑いすぎなアンソニーをにらみつける。

「なんだ行かねえのかよ。はなせよお、アンつあんがお月さん行こうって言ったんだろオ？」

笑いすぎてひっぴとしゃくりあげるアンソニーが、乱れた呼吸を整えながら答えた。

「俺ア…、俺アなあ、心を軽くしろって言ったんでえ。誰が、ぶふっ…頭を軽くしろって言ったよ、このバアカ」

その言葉に、ジョンがじっと黙り込み、それに気づいたアンソニーが覗きこんで尋ねます。

「……おい、どしたんでい？」
「どおもしねえ」

ぶいと反対側、丁度鉄扉のほうにそっぽを向いたジョンの顔は、辺りを包む闇に解けてしまい、アンソニーには表情すらうかがうことはできませんでした。

アンソニーはその首根っこをいま一度高く持ち上げ、猫にでもするよにジョンの脇腹をくすぐります。

「どおもしてねえって言ったじゃねえかっ！ はなしてくれよ！」
仏頂面のままで細い身体をよじり襟を握っている太い腕を引き剥がそうとするジョンに、アンソニーが呆れた顔で声を出す。

「ホントに世話の焼ける野郎だな！ だからおめえは」
「遮ったのは、獣のような唸り声だった。」

「ううううううううるせえな！ はなせって言うてんだよ、このシオンベン垂れのクソでぶ野郎っ！」

ジョンの暴言に、アンソニーの口がぴたりと止まる。鬼気迫る表情でにらみつけてくるジョンの唇は、怒りでめくれ上がっていた。

「でぶに物なんか言われたかねええんだよ！ いったもいっつもいっつもいっつも偉そうにいいしやがって、でぶは、でぶなんか黙ってるおっ！」

そう叫ぶやいなや、ジョンは自分を持ち上げているアンソニーのどてっ腹を、これでもかというほどに蹴り上げました。

黒い鉄下駄が柔らかすぎる脂肪を押し上げて、重い肉に突き刺さる。

一瞬のことに目を見開き、ただぐうとだけ鳴いたアンソニーの腕をジョンが憎々しげに払いのけ、その細い身体が月の重力に従ってふんわりと着地致しますと、ジョンの後ろでは鉄下駄をめり込ませた肉の塊が、がっくりと崩れ落ちておりました。

身体を丸めたアンソニーは歪む顔面に脂汗を浮かせ、小さな声で唸ります。

「う…ぐ…、ジョン…：…てめえ…何しやがる、こんチキシヨウ！」
片足だけに鉄下駄を残したジョンが、ふらふらと体をくねらせながら、甲高く狂気じみた声で笑い始めました。

その顔は、いつもの泣き虫とはまるで別人のようで…。

「アハツ、アツハハ！ いいざまあゝだなゝ、アンつああん。おいらさあゝ、前つから言おうと思つてたんだよお。自制心のないでぶが、人様のこと上から物見て言つてんじやねえつてよ！ だあつてそうたるお？ アンつあんでダイエットするつて、出来てねえじやねえか」

「そりや…、そうだが」

ふつふつと呼吸を荒らげるアンソニー。その上下する腹の肉を見つめたジョンが、歯を食いしばつて言った。

「おいらさあ、アンつあんが痩せるの楽しみにしてたんだゝ。アンつあんが痩せたら、おいらも太れる気がして…、アンつあんの肉が

全部、おいらんとこ来るんじゃないかって思ったりし、て……さ……」
不自然に途切れた語尾とともに、ジョンの吊り上げていた目も眉もふにやりと崩れ、ぼろぼろと涙がこぼれたかと思うと突然いつもの泣き虫に舞い戻る。

「……うわあああん！ アンつあん、痩せるって言ってたじゃねえかよお……！ おいらどうしたらいいんだよお！」

アンソニーの脳裏に、先月痩せると公言した自身の姿が思い出された。

「ジョン……そうかおめえ……だからあん時、あんなに喜んで……」
「そおだよお！ アンつあんが頑張るなら、おいらも頑張ろうって、おいら……おいら……、びえええええん！」

あの時ジョンは上機嫌で夕飯をご馳走してくれたあと、帰路の途中で嬉しさのあまり泣き出したのだった。

「そりゃあ……悪、げほっ！ ……げほ！ げっほげほ！ 悪いことしちまった……」

アンソニーが咳き込むたびに、有り余るぜい肉が大きな波を打つ。それをうつとりと見つめながらジョンはぐいと涙を拭き、苦しうにあえいでいるアンソニーの傍らへと座り込みました。

「なあ、アンつあん……。今度こそ痩せようぜ？ おいらも太るかからさあ。それで二人してオンナ作るんだ、幸せになるんだよ、なあ……？」

「……ああ……わかったよ。でも蹴るこたアなかつたぜ……」
アンソニーは息を整えてから首を傾げ、目の前のジョンを盗み見る。

それは、思いつめて、つめて、つめて、つめすぎるまでつめないと行動を起こさないジョンにしては、珍しく軽率めいた行動を起こしたものだと思ったからに他なりません。

先ほど垣間見た妙な顔つきに不気味な高笑い。

今は微塵も残っていないそれらはアンソニーの頭に、咎人特有の何かを想像させた。

アンソニーの背筋から、薄ら寒いものが耳の裏めがけて走ってきます。

一方ジョンはというと、いつもと変わらぬ様子でアンソニーのぶよりとした腹をなで、そこにうずまった鉄下駄を引き抜いておりました。

「アンつあん、蹴ったりなんかしてごめんなあ。でもおいら、月に来てよかったよ。心が本当に軽くなった気がする。衝動的にアンつあん蹴ってみたら、なんか妙にスッキリしたんでい。言いたいこと言えるっていいなあ、やりたいことやれるっていいなあ。お月さん来たら、『こんなことやっちゃいけねえ』って思う気持ちが消えて、胸ん中すつとした気がするやあ……」

ジョンは真つ黒な夜空に向かって気持ちよさそうに大きく深呼吸をし、海の色が光る地球をその目に映す。

ずきずきとした痛みの残る腹部をむつちりとした手で撫でさすっていたアンソニーが、ジョンの視線を追いかけて呟く。

「……そうか？ 俺ア…あんまし変わらねえがな」

「そりやそうだ、アンつあんは普段から、やりたいことしかやってねえからさ」

ジョンが、あははと屈託なく笑った。

その笑顔がいつもと変わりないように思え、アンソニーもふと口元をほころばせた。

「……そうか、そうだな。ジョンの言う通りだ」

二人は顔を合わせて笑いあい、そのままどうでもいいような話ばかりを四半刻ほど続けておりました。それはそれは、いつもと変わらぬ調子で御座いました。

「いやしかしよあ、せつかくてめえの気分が軽くなったのに、宿もないってんじゃ、日帰りするしかねえよなア」

そう言って襟を正し体を起したアンソニーに向かって、顔を上げたジョンが、まだ話し足りないとはかりに尋ねます。

「なあな、アンつあんよつ。どんな方法で痩せるんだい？」

アンソニーはその問いかけに、背伸びをして身体をほぐしながら答えた。

「そうさなあ、巷で噂の『脂肪吸引さま』がもつと安けりゃあ、俺だってあつという間に痩せてやるんだがなあ」

そう言って、ぼん！と腹太鼓を叩いてみるアンソニーに、ジョンが手を叩いて笑い声をあげる。

「へっへへ、言うと思つたあ！ アンつあんにゃ地道な運動は似合わねえもんつ！ でもよお、もしそうできたら、アンつあんから取った脂肪をおいらの身体に移せば一件落着だよなあ」

平目のように薄い腹を鶏がらみてえな手でさすったジョンが、さもつらやましそうに、大きくせり出したアンソニーの腹を見上げました。

それに気がついたアンソニーは悪戯っぽく笑ってからぴよんと飛び跳ね、贅肉をゆさゆさ揺らしながら提案します。

「じゃあよオ、おめえ俺と仲良く並んで手術してもらうか？ 二人なら割引だつてきくかも知れねえし、医者との交渉が上手く行きゃあよ、一人分でやつてくれるかもしれねえぞ！」

あつと声をあげたジョンが、興奮気味に話し始める。

「そうだ！ 今日おいらを振った女！ あの娘ビューティークリニックの研修生だつて言つてた！ 昨日の夜、何の気なしにおいら、脂肪吸引の話聞いたんだ。…なんかよお、アンつあん。あの娘が言うにゃあどんな手術より簡単だつて。ちょっと切ったところから長い棒を皮の下に入れて、ゴシゴシこすつて吸い取ればそれで終わりなんだつてよ！」

「なんでえそんなに簡単なのかよ！ っかー、医術つてのはすげえなあ」

アンソニーはそう言いながら、自分のアゴでだぶついている脂肪

のひだをつまみ「これも一日で取れちまうんだろつなア」と呟く。
まだ座ったままのジョンが、ぱんつとヒザを叩いて話の続きを始めます。

「それなのに何でべらぼうな費用を取ってるのかって聞いたらさあ、長い棒と、吸い込むための機械が高いんだって。安く済ませたいんなら棒じゃなくて手で掻き出しちゃえばいいのよって言ってたんだ！ だからあ、アンつまんっ！ おいらがタダでしてやるよお！」
はつらつとした口調で笑顔するジョン。

なかなか腰を上げないジョンをちらりと見やり、帰宅を促す視線をじつと送るアンソニー。

いつもなら、その視線一つでパツと腰を上げるジョンなのですが、今日はまたどうしたことか上手くいかねえようで、返事を期待するジョンの笑顔に根負けしたアンソニーが仕方なしに応えます。

「……ほお、そりゃあ面白い。おめえは俺と違って手先が器用だからな……」

気もそぞろな対応だったにもかかわらず、ジョンのは心底嬉しそうに言った。

「名案だろお？」

その問答にうんざりしてきたアンソニーが、答えながらバス停の方向に体をよじる。

「おお、そうだな。おめえにしちゃ上出来な考えだ。ずいぶん考え方もライトになったみてえだし、そろそろ　ぎゃあ！」

アンソニーに向かつて、しゅつと走った光が腹部をかすめたかと思えますと、すぐさま切れのよい痛みが伝わりました。手の平ほどの長さでぱくりと割れた横っ腹には黄色い口が開き、一瞬の間があつてからじんわりとした速さで鮮血が流れ出てまいります。

どてりと尻餅をつき、一閃の光の正体を探すアンソニーが見たものは、困った顔で包丁を握っているジョンの姿でありました。

「名案なのに、なあってよけるんだよ。手術するんだらあ？」
素っ頓狂な声を上げるジョンに、傷の浅さを確認したアンソニー

が大声で怒鳴る。

「ここ、このうつけ！ 冗談はそのへんでよさねえか！ ライトになるのも大概にしゃがれってんだア！」

そう言ったアンソニーは、大慌てでもって手ぬぐいを取り出し、腹の傷を覆って力いっぱい押さえました。

「冗談じゃねえってば、おいらめっばう本気だよ？」
くすりと笑い声を漏らしたジョン。

そのとろりとしていた目がゆっくりと吊り上がり、眉は軋むように震え始めております。

大真面目な顔の中で怪しく光るジョンの両目が、すうっと細められたかと思うと、口角もニイと引き上がりました。目の前に現れたのは、暗闇に包まれて青く浮かび上がる、鬼のようなジョンの顔。

あまりの恐ろしさに、アンソニーの声は震えていた。

「…ジョン……どうしたんでえ、何だかいつもと様子が……」

腰を上げられぬまま無様な格好で月面を後ずさるアンソニーに、逆手に包丁を持ったジョンが一步一步とねじ寄ります。

本気だ、本気で狂っちゃった。

そう感じたアンソニーはジョンから逃げ出すべく、脂汗でぐっしよりした体を驚くほど素早くひるがえした。

四つんばいになって立ち上がるうとした右手が、ぐん、と月面に押し付けられた時、アンソニーの耳に嫌いな音が届きました。それは太い糸が切れるような、小枝が折れるような音が織り交ざっていて

「いいいぎゃあああああああ！」

ようやく伝わってきた激痛に、アンソニーが大声で叫びます。

手の甲には、ジョンの持つ包丁が深々と食い込んでおりました。

包丁を握っていた手が、すつと離れたかと思うと、痛みに苦悶するアンソニーの耳元に、ひと粒のしずくが滴った。

吐息すら聞き取れるほど近くで、ジョンが唾液のこぼれた唇の端をしゅるつと舐め上げて言いました。

「だあいじよぶ、麻醉すれば、一瞬だから」

冷たく響いた声を引きつった笑いに変えたジョンは、何のためらいもなく鉄下駄を握りしめ、それを肉の盛り上がったアンソニーの延髄めがけて振り下ろします。

「た、た助けてくれえ！」

重たく鈍い音とともに、湿っぽくねとついた、ぐちゃりという音が響きました。

肉を揺らして跳び上がった太り肉な男の手足。

鉄下駄の一撃で、そこら中に脳髓をぶちまけて動かなくなったアンソニーの右手から、よいしょと包丁を引き抜いたジョンは、期待に満ちた表情で手の平をすり合わせます。アンソニーの体をごろりと仰向けに転がしたジョンが、その巨大な着物のあわせをぐいといっぱいに広げまして、生っ白い太鼓腹を青い地球光に晒しました。

そしてアンソニーのたもとで包丁についた土を拭くと、先ほどつけた横っ腹の傷に包丁を当がい、一気にざぁーっつと滑らせます。横一文字、真っ黄色に開いた溝を恍惚とした表情で覗き込むジョンが、両手をゴシゴシと身ごろに擦り付けてから口中の唾を飲み、その黄色い溝へと、指先：手の平：手首：腕：と、実にゆっくり差し入れてゆきました。

「いひつ、ひひひ…コレだあ…。アンつぁんが要らなくて、おいらに必要なモノ……」

まるで散らばった大判小判をかき集めるような仕草で、アンソニーのまだ温かい腹の中から山吹色の脂肪を両手いっぱいにすくい出したジョンは、ぬらぬらと光り輝く脂の塊に頬ずりを致します。

そして、そのまま顔をずらしたジョンは、その塊に顔を埋めて上を向くと、ごくろごくろと喉を鳴らして飲み干してしまいました。

「アンつぁんつて、本当にいい奴だよなあ…。いつでもおいらを助けてくれてよお」

薄ら笑いを浮かべた脂だらけの顔で、また脂肪をかき出したジョンが、アンソニーの胸の上に置いてあった包丁を取り、自分に

締めてある角帯かくおびを断ち切ります。

「これを、おいらの皮ん中に入れればさあ……」

そう言ってジヨンは気味の悪い笑い声とともに、ためらいなく自分の腹を一文字にさばきました。

鮮血がほとばしる傷口に、笑いながらぐいぐいと脂肪を詰めてゆくジヨン。

脂肪の入れ替えが何度か繰り返されたところで、突然にバツとジヨンの腹から何かが飛び散りました。

それは、ジヨンの臓物。

きよんとするジヨンでありましたが、それも当然のこと。あまりに薄いジヨンの腹は、浅く切ったつもりでも内臓のすぐ手前まで届いてしまう深い傷になってしまったので御座います。

青白く光る地球光に照らされ、力なく倒れたジヨンの姿。

その音を最後に静かになりましたるは、月の裏側を隔てます、大きな大きな門の前。

真っ赤に広がる血だまりだけが、じわじわといつまでも広がり続けておりました。

ところがしばらくすると、あたりが何やら騒がしくなってきた。

鉄門の中にある物見やぐらのてっぺんから、かーんかーんとおごそかな鐘の音が打たれております。

少しいたしますと、鉄門のはじめに作られたくぐり戸から次から次へと数珠なりに、人間たちが現れたではありませんか。

出てきた十人ほどの者たちは、みな一様に頭を丸め、生成りの作務衣むえを着ております。

息の絶えたアンソニーとジヨンを囲むようにして立った男たちは、ゆっくりと合掌をすると、実に丁寧に二人の骸むくろを道の脇へと運んでゆきました。そしてクワやらスキやらで、二つの穴を掘り始めます。スキを持った男が、作業をしながら静かな声で話し始める。

「ようやっとな商人たちの殺し合いが終わっても、知らずに来てしま

う者がいるのは悲しいことですね」

ザクザクと穴を掘る男たちの後ろには、古びたたくさんの塔婆はつぽが白い林のように見えていた。

クワを手にしたまま地球を見上げた男が、溜め息混じりに呟く。

「いまの御奉行様は、いささか欲深いと聞く。月を『癒し』の観光地に仕立て上げ、大金をせしめるおつもりだとか……。そんなお方だ、どうせろくな御裁きもしておらんのだろう、近頃は情状酌量の咎人など来ぬではないか。シャトルバスなど運行停止にしてみえればよいものを」

アンソニーに合掌を続けている男が、静かな声で制止をした。

「そんなこと言うものではありませんよ。先代奉行がバスを開通させてくださった、そのお陰で私たちは、こうして悲しみから逃れ、和やかな人生を送れているのですから」

「しかし……！」

掘り終えた二つの墓穴に、アンソニーとジョンがおさめられると、読経の声とともに掘り出した土が被せられてゆく。

白木の塔婆が刺され、全ての供養を終えたあと、怒りに震える男の肩に柔らかな女の声がかげられました。

「……そのように憎悪して、この先どうするといのです。地球へ戻り、御奉行を殺めますか。また罪を犯すつもりですか。その手を罪に染めた時どれほど悔やんだか。月にいるなら、決して忘れてはならないのですよ」

月の重力、地球にくらべりゃ、その比はなんと六分の一。

長居もすれば、体重どころか、罪の重さも六分の一に思えてくる。罪の呵責と自責の念にゃ、これ以上ない良薬も、普通のシトには毒になるてえことすな。

と、あたしの噺は、これにて御開き。
どござらおあとが宜しいようぞ。

てけつん、てけつん、てん、てん、とととん。

（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

初めてのホラー、初めての落語風味。

手探り状態でしたが、書いていてとても楽しかったです。
みなさまが少しでも楽しんでくださってたら、本望です。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4678c/>

怪談落語～月面重力ゲタ道中～

2008年8月29日18時23分発行